

## 足柄山歌群

渡部 和雄

一

東歌には足柄（山）の歌が割合多くある。それは足柄山が歌の在り様に対して特別な意味を持っていたからである。う。たとえば、

三三六一 足柄の彼面此面に刺す罍のかなる間しづみ児ろ吾紐解く

三三六二 相模嶺の小峰見そくし忘れ来る妹が名呼びて吾を哭し泣くな  
或本歌曰 武蔵嶺の小峰見かくし忘れ行く君が名かけて吾を哭し泣くる

三三六三 我が背子を大和へ遣りてまつしだす足柄山の杉の木の間か

三三六四 足柄の箱根の山に粟蒔きて実とはなれるを逢はなくもあやし  
と並べられている歌は足柄（山）が持つイメージによって統括されているのではないか。というのは、

三三六二 相模祢乃乎美祢見所久思和須礼久流伊毛我名欲妣弓吾乎祢之奈久奈

或本歌曰 武蔵祢能乎美祢見可久思和須礼遊久伎美我名可氣弓安乎祢思奈久流

という二首も、その〈足柄山〉というものに含まれている歌ではないかと推測するわけである。

「或本」というのは、別資料本でしかも本文とある関係を持つものらしい。本文歌より先にあって、それは儀礼の場で利用された。四四二二 我が背なを筑紫へ遣りて愛しみ帯は解かなあやにかも寝も

右の一首は、妻服部皆女のなり

というのは妻（残る女側）の歌である。

四四二八 我が背なを筑紫は遣りて愛しみ帯は解かなあやにかも寝む

は、「右の八首は、昔年の防人の歌なり」という中の一首である。それは、

主典刑部少録正七位上磐余伊美吉諸君、抄写して兵部少輔大伴宿祢家持に贈れり。

といった次第のもので、とすれば磐余伊美吉諸君の許には件の防人歌も含んだ歌集様のものが存在していた。これが〈或本〉と呼ばれたる資料本の一つであってかまわないであろう。

即ちこの〈或本の歌〉（昔年防人歌）は、実際の時（天平勝宝七歳二月九日）、妻によって歌われ、その送別儀礼

に夫は、状況に沿ったように本文歌を歌うのであろう。故に四四二二の歌への返し歌（本文歌・反歌）は拙劣歌として採録されない（こともあった）。

昔年相替防人歌

四四三六 闇の夜の行く先知らず行く我を何時来まさむと問ひし児らはも

は卷十七の、

三七九七 大海の奥処も知らず行く吾を何時来まさむと問ひし児らはも  
に似ていて訛音も含まない。送別儀礼の元になる歌（別資料）があつて、それが時に當つて利用され、それに本文歌  
が和されたい。

## 二

右の二首の歌は、家に残る女の歌、と旅に出る男の歌との対応、送別儀礼の形式を持っている。

大宝元年辛丑の秋九月、太上天皇の紀伊国に幸しし時の歌

五四 巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ偲はな巨勢の春野を

右の一首は、坂門人足

五五 あさもよし紀人羨しも亦打山行き来と見らむ紀人羨しも

或本歌

五六 河の辺のつらつら椿つらつらに見れども飽かず巨勢の春野は

右の一首は、春日藏首老

旅の儀礼歌には使つてもよい別資料があつたのであろう。それは共通の理解であつた。旅と宴は律令政治（官僚）  
の直会であり、個性、資質の消去法であつたから、歌は均衡と一般性の恢復、矛盾の忘却であつた。

二年壬寅、太上天皇の参河国に幸しし時の歌

五七 引馬野にほふ榛原入り乱れ衣にほはせ旅のしるしに

右の一首は、長忌寸奥麿

五八 何処にか船泊てすらむ安札の崎漕ぎ廻み行きし棚無し小舟

右の一首は、高市連黒人

誉謝女王の作れる歌

五九 ながらふる妻吹く風の寒き夜にわが背の君は独りか寝らむ

長皇子の御歌

六〇 暮に逢ひて朝面無み隠にか日長き妹が廬せりけむ

舍人娘子の従駕にして作れる歌

六一 大夫が得物矢手挿み立ち向かひ射る円方は見るにさやけし

で、五七、八は旅中の歌、五九、六〇は残留者の歌、『全集』では「資料が異なるのであろう。」という。五九、六〇、

六一は作者名が歌の前に置かれている。

『講談社文庫 万葉集』に、

以下三首も右と同時、資料は別。

という。資料が別であるのは残留組のは別に記録されていて、それが旅行の歌と、先ず六一と合体して、記録され、それにまた五七、八と合併されて旅の相聞風に仕上げられた、即ち〈送別儀札〉という時点で統括されて、「同時」の性質を持つのであろう。

本文と或本が次元を異にして同時の送別儀札歌をなしているのに似ている。即ち五九、六〇、それに六一も加えて、これらは送別儀札における〈或本性〉を持つのである。

伊勢国に幸す時に、京に留まれる柿本朝臣人麻呂の作る歌

四〇 嗚呼見の浦に船乗りすらむ憾孀らが珠裳の裾に潮満つらむか

四一 くしろ着く手節の崎に今日もかも大宮人の玉藻刈るらむ

四二 潮騒に伊良虞の島辺漕ぐ船に妹乗るらむか荒き島廻を

当麻真人の妻の作れる歌

四三 わが背子は何処行くらむ奥つもの隠の山を今日か越ゆらむ

石上大臣の従駕にして作れる歌

四四 吾妹子をいざ見の山を高みかも大和の見えぬ国遠みかも

では、四〇―四三は留守居の人々が旅人への相聞を作っている。残留組の宴もあつたらしい。四四は従駕作で、二者合併して送別儀礼を形成する。

三

東歌に、

三三七一 足柄の御坂畏み曇り夜の吾が下延へを言出つるかも  
という歌があり、これは足柄峠越えに関する歌であろう。

防人歌に、

四四二一 我が行の息衝くしかば足柄の峰延ほ雲を見とと思はね

という歌があるのは、当然「足柄越え」を基盤に発想されている歌である。

東歌、防人歌の東国人の歌には、イメージの統合性のようなものがある。街道毎にそうなっている。

四四二三 足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹は清に見もかも

埼玉郡の上丁藤原部等母磨

四四二四 色深く背なが衣は染めましを御坂賜らばま清かに見む

妻物部刀自売

というのは防人の送別儀礼歌である。埼玉郡から「足柄の御坂に立して袖振らば」といつている。妻の歌が先かも知れないが、防人歌の配列は律令制的配列になっている。

四四〇七 ひなくもり碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく恋らえぬかも

は、もう一つの街道、碓氷越えであるが、これも碓氷の一般的なイメージがあつて、その「碓氷越え」という送別儀礼の時に、残された妹が別れを悲しんでいたのが忘れられないといっているのではないか。

東歌中の防人歌に

三五六七 置きて行かは妹はまかなし持ちて行く梓の弓の弓束にもかも

三五六八 おくれ居て恋ひば苦しも朝狩の君が弓にもならましものを

右二首、問答

とある。ここでも送る側（女）の歌が後になっている。

田部忌寸櫛子の大宰に任けられし時の歌四首（の中）

四九二 衣手に取りとどこほり泣く児にもまされるわれを置きて如何にせむ 舍人吉年

四九三 置きて行かば妹恋ひむかも敷栲の黒髪しきて長きこの夜を 田部忌寸櫟子  
という形もある。またすぐ前の

三三六〇 伊豆の海に立つ白波の在りつつも継ぎなむものを乱れしめめや

或本歌曰 ( ) 白雲の絶えつつも継がむと思へや乱れ初めけむ

では、「乱れ初めけむ」(或本) ↓ 「乱れしめめや」(三三六〇) の順序にしてもいいのではないかとも思われる。

三四九三 遅速も汝をこそ待ため向つ峰の椎の小枝の逢ひは違はじ

或本歌曰 遅速も君をし待たむ向つ峰の椎の小枝の時は過ぐとも

とあるのは、(或本歌・女) 「時は過ぐとも」 ↓ (三四九三・男) 「逢ひは違はじ」の方がいいのではないか。

で、他の巻の在り様も参照して、

先に、女、或本歌 武蔵嶺の小峰見隠し忘れ行く君が名かけて吾を音し泣くる

後に、男、三三六二 相模嶺の小峰見退くし忘れ来る妹が名呼びて我を音し泣くな

と置いてみる。

女(送別側)は武蔵にいる。送別儀礼歌はそこで行われる。

見隠し(見可久思)

見退くし(見所久思)

と、西宮一氏「見所久思」考によって二つに分けてみた。武蔵嶺に対しては〈見ないようにして〉、相模嶺に対しては〈遙かに遠くみて〉と區別してみるわけである。

忘れ行く君

忘れ来る妹

で、《忘れ行く君》という云い方は、送別側の儀礼表現であろう。対して《忘れ来る妹》は“足柄山”を基準にして旅人の表現であろう。二つの「忘れ」は、東国における送別儀礼の限界線を《足柄》に置いていたらしいから。前にも挙げた、

足柄の峰延ほ雲を見とと偲ばね

などによって推測できる。

上総の国の朝集使大掾大原真人今城、京に向ふ時に、郡司の妻女等が銭する歌二首

四四四〇 足柄の八重山越えていましなば誰をか君と見つつ偲はむ

四四四一 立ちしなふ君が姿を忘れずは世の限りにや恋ひわたりなむ

との様に「忘れ」と「足柄」（の八重山）は歌を構成している。

君が名かけて

妹が名呼びて

は、男女の対応であるが、

三三九四 さ衣の小筑嶺ろの山の崎忘ら来ばこそ汝をかけなわめ

とあるように「名（を）かけ（る）」ためには「忘れ」（忘ら来）が要求されているわけである。

吾を音しなくなる

吾を音しなくなる

『全集』では、両方とも



この泣くは下二段に活用し、泣かせるの意。とする。本文の「妹が名呼びて」の方を、

妻の名を同行者が口にすることをいう。ただし、第三者が故意に作者の妻の名を呼ぶとは思えられず、或本の歌に「君が名かけて」とあるように、それと同音の語をたまたま口にしたことをいったのであろう。

とし、「君がかけて」の方を

作者（女）の周囲の者が、作者の夫の名と同音の語を口にしたことをいうか。

とする。それが〈私を泣かせる〉となると偶然の機微を良く捉えているようであるが、送別儀礼の歌という考え方は、もっと一般的な構造ではないか。

『全集』では状態を、

原歌は相模をあとに仲間と連れ立って旅する男の歌。或本の歌は、武蔵国から旅立った男の妻の立場で詠んだ歌と考える。そこでは同行者がたまたま同じような音の語を口に出したので、作者に働きかけているわけではない。歌はますます孤独に引き込まれたものになる。しかし同様な歌が妻にも詠まれているのだから、このカラクリは公然のものではないかならなかつたらう。その公然さを送別儀礼といってみる。ここではもっと一般的な構造をいつているのではないか。

【全注】に、

三三六二 私は自然と泣けてくることだ

或本 私は声をあげて泣くことです

と訳している。

〈泣く〉は相手へのアピール、送別儀礼の一種の挨拶語である。

三四五八 汝背の児や等里の岡道し中だ折れ吾を哭し泣くよ息づくまでに  
も送別歌であらうし、前歌の、

三四五七 うち日さす宮の我が背は大和女の膝まく毎に吾を忘らすな  
も送別の宴のものであらう。並べて掲げられている。

「吾を哭し泣くよ」「息づくまでに」「忘れ（らすな）」は形式的な表現になっている。

三一八八 息づく君を

三五二七 息づく妹を……八尺鳥息づく妹を置きて来のかも

三五四七 あな息づかし

などは送別儀札の歌であらう。

三五一五 吾が面の忘れむ時は

三五二〇 面形の忘れむ時は

四三六七 吾が面の忘れも時は筑波嶺をふりさけ見つつ妹は偲はね

四四二一 我が行の息衝くしかばね足柄の峰延は雲を見とと偲はね

四四六七は常陸国防人、四四二一は武蔵国防人の歌である。

武蔵国においては〈足柄〉が送別の、歎きの範囲を作っていたらしい。

## 四

武蔵嶺の小峰見かくし



相模嶺の小峰見そくし

の関係は足柄に向かうものである。足柄が送別儀礼の範囲、というよりは東国（武蔵国）では足柄峠の存在によって送別が成立する。

『万葉集 東歌・防人歌』に、

相模嶺 大山（雨降山）か。

武蔵嶺 秩父の山々をいうか。

とあるが、その辺が妥当なのだろう。〈相模嶺〉〈武蔵嶺〉という表現なのだから、丹沢山塊、秩父山地などを考えればいい。

「武蔵嶺の小峰」を「見ないでふり向かず」に。（右『東歌・防人歌』風に）私を忘れて行く君。この「君」は夫や村人よりは官人などを基本にしている表現である。先にあげた、

大原真人今城向京之時郡司妻女等銭之歌

四四四〇 誰をか君と

四四四一 君が姿を

という把握の仕方に似ている。逆に三三六二で、「忘れ来る妹が名」というが、夫が妻（妹）の名を忘れ来るという表現は多分ありえない。

だからこの「忘れ行く君」は官人風である。

藤原宇合大夫遷任上京時常陸娘子贈歌

五二一 庭に立つ麻手刈り干し布さらす東女を忘れたまふな

とあるように〈忘れ〉は官人の性質であった。とすると、「武蔵ネのヲミネ」には寝を含んだ遊女風の情緒がある。郡司の妻女にしても、常陸娘子にしても歌い振りは遊女性に似ている。女は媚の性質で女なのであろう。

その「君が名かけて」（君の名を呼んで）私は泣けることだ、という女の送別儀礼歌。

君は武蔵から相模に向かう。相模嶺（大山・丹沢の山々）を遠くに見（遙か後ろにして）足柄の御坂では「忘れ来る妹が名呼びて」（三・四句は前歌のくり返し）私は泣くよ。（私も妹の名を呼んで泣くでしょう）。

武蔵国（送別儀礼の場）

伊勢原（相模嶺）

松田

関本

足柄峠（送別儀礼を含む限界点）

ここで、都へは持っていけない、忘れようとして来た女の名、その名を呼んで私も泣けてくることだ。

三三七一 足柄のみ坂畏み曇り夜の我が下ばへを言出づるかも

三七三〇 恐みと告らずありしをみ越路の手向に立ちて妹が名告りつ

ここは送別儀礼（の場）の完結だから前歌と対応した歌になる。

四四二三 足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹はさやに見もかも

右一首 埼玉郡上丁藤原部等母麻呂

四四二四 色深く背なが衣は染めましを御坂たばらばまさやかに見む

右一首 妻物部刀自売

三三六二（妻） 四四二三

或本歌曰 四四二四

（夫） 三四四二

足柄山△（妻） 三三六三

（四四〇四）

（四四〇五）

四四二一

（夫） 四四二二

足柄山が送別儀礼の限界点なら、そこで妻が夫の帰りを待つこともある。

三三六三 我が背子を大和へ遣りてまつしだす足柄山の杉の木の間か

足柄を越えては、

四四二一 我が行の息衝くしかば足柄の峰延ほ雲を見とと偲はね

四四二三 我が背なを筑紫へ遣りて愛しみ帯は解かなあやにかも寝も

という風になる。

## 五

三四三二 足柄の和乎可鶏山の穀の木の我をかづさねも穀割かずとも  
の「ワヲカケ山」は、たとえば『万葉集 東歌・防人歌』などでは、「矢倉嶽のことか。」  
としている。

或本歌「君が名かけて」(女)

三三六二「妹が名呼びて」(男)

で、足柄峠で、男は妹が名を呼び、女は〈我が名をかけ〉られる。

女にとって足柄山は「ワヲカケ山」なのであろう。足柄のワヲカケ山のカチの木ではないが、  
「ワヲカヅサネモカズス」誘う。「誘い出して下さいな。」

カヅス・カクスは片付ける。整理する。結婚させる。

私を誘い出して連れて行って下さい。(都)では穀を割くような生活をしていらつしやるわけではないでしょうが。  
都に行く旅人(官人など)への送別歌。

常陸娘子の歌に、

五二一 庭に立つ麻手刈り干し布さらす東女を忘れたまふな  
とあるのは先に見た。生活を表現して男に訴えている。

東歌の「防人歌」という項に、

三五六七 置きて行かば妹はま愛し持ちて行く梓の弓の弓束にもがも

三五六八 おくれ居て恋ひば苦しも朝狩の君が弓にもならましものを

右の二首 問答

というのがあつた。これは基本的な表現であらう。一緒について行きたい気持ちをいっている。

これは「おくれ居て恋ひば苦しも」の定形表現が先であつたらう。それが卷二十の防人歌では夫↓妻の順序に整えられた。

遊女などの場合は〈贈歌〉だけ、答歌などがなくても当り前だったのかも知れない。へカヂを割く、こんな山道の生活などはなさつていないでしょうけど〉は余裕の表現である。

防人歌にしても必ずしも行政的な按配にはなっていないのである。

四四一五 白玉を手に取り持して見るのすも家なる妹をまた見てももや

右一首 主帳荏原郡物部歳徳

四四一六 草枕旅行く背なが丸寝せば家なる我は紐解かず寝む

右一首 妻椋椅部刀自売

では、夫↓妻と配列されているが、妻は伝統的な慣用語を使っているから、夫の歌とは問答にはなっていない。

四四一七 赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山徒歩ゆか遣らむ

右一首 豊島郡上丁椋椅部荒虫之妻宇遅部黒女

という歌は妻の歌で夫の歌はない。生活が見事に表現されていて、答歌などかつにはつかないほどの歌である。

送別歌では本来的に送歌の方が積極的、情熱的なのである。

四三四七 家にして変ひつつあらずは汝が佩ける太刀になりても斎ひてしかも

右一首 国造丁日下部使主三中之父歌

四三四八 たらちねの母を別れてまこと我旅の飯廬に安く寝むかも

右一首 国造丁日下部使主三申

も、父↓子は行政的配列であるが、これは一般の生活性でもある。それで「家にして恋ひつつあらずは」と歌う方が先に来ている。そして一緒にいて行きたいと願っている。

四四一九

四四二〇（妻）

四四二一

四四二二（妻）

四四二三 足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹は清に見もかも

右一首 埼玉郡上丁藤原部等母麿

四四二四 色深く背なが衣は染めましを御坂賜らばま清かに見む

右一首 妻物部刀自売

も、繰返すように、本来は送る側（女）の歌が先にあつたのではないか。

さてその送別儀札歌の限界点、眺める所が足柄であつたとすると、

三三四二 東路の手児の呼坂越えがねて山にか寝むも宿りはなしに



の「手児の呼坂」という普通名詞風の所は一般に未詳とされているものであるが、『全注』に「語義的には、去り行く男を手児Ⅱ女が呼びかけて別れを惜しむ坂であり、」とあり、

三四七七 東路の手児の呼坂越えて往なば吾は恋ひむな後は逢ひぬとも  
の歌と合わせて、〈東路〉の〈呼坂〉というのは足柄峠のことではなかったろうか。

藤井連遷任上京時娘子贈歌

一七七八 明日よりはわれは恋ひむな名欲山石踏み平し君が越え去なば

藤井連和歌

一七七九 命をし真幸くもがも名欲山石踏み平しましたまたまたも来む

という歌からみると三四七七は東国の娘子が都へ帰る官人を送った送別儀札歌であり、都合よく考えれば、足柄を越えかねている（という）男の答歌が三四四二である。

冬十二月大宰師大伴卿上京時娘子作歌

九六五 凡ならばかかも為むを恐みと振り痛き袖を忍びてあるかも

九六六 倭道は雲隠りたり然れどもわが振る袖を無礼しと思ふな

大納言大伴卿和歌

九六七 倭道の吉備の児鳥を過ぎて行かば筑紫の児鳥思ほえむかも

九六八 大夫と思へるわれや水葦の水城の上に涙拭はむ

という具合になるはずのものだろう。

## 六

東路の手児の呼坂越えがねて山にか寝むも宿りはなしに

も、日程や距離によつてというわけではないだろう。そこが離別の限界点と意識させられていたから〈越えがねて〉いるのだらう。

三三七〇 足柄の箱根の嶺ろの和草の花つ妻なれや紐解かず寝む

では、上三句が序のようにあつて、四・五句が本意であるとして、〈花つ妻というわけで紐解かず―今夜はこうして紐も解かず―寝るのだろうか〉といつてゐる。

「花妻」という表現は、

一五四一 我が岡にさを鹿来鳴く初萩の花妻どひに来鳴くさを鹿

四一一三 ……なでしこがその花妻にさ百合花ゆりも逢はむと……

和草の 花つ妻

初萩の 花妻

なでしこが その花妻

と似た形にあつて、〈花のように美しい妻〉という内容らしい。

一五四一「初萩の花妻」の場合は、

一七六一 ……秋萩の妻をまかむと……

などから、萩は鹿の共寝の妻とされる。

で、足柄の箱根の嶺ろの和草の、は〈足柄の箱根の寝ろの和草〉ではないが、と伝聞風の序。(ここは寝代の柔草ではないが)、花妻というわけで紐も解かず寝ることにしよう。

紐解かず寝る旅寝を、鹿が萩をしとねに寝ることに似せた。

草と寝の関係は、

三四九七 川上の根白高萱あやにあやにさ寝さ寝てこそ言に出にしか

三四九八 海原の根柔小菅あまたあれば君は忘らす我忘るれや

三四九九 岡に寄せ我が刈る宣のさね萱のまこと柔は寝ろとへなかも  
など多くみられ、それは多くは男女の共寝を示していた。

一方、旅としての防人歌では、

四三二一 畏きや命被り明日ゆりや草が共寝む妹なしにして

と、いきなり、「草が共寝む」「妹なしにして」と幕を明けるわけである。

四四二〇 草枕旅の丸寝の紐絶えば吾が手とつける此の針持し

は妻の歌。草枕では丸寝、紐解かず寝る。それに対応して妻も、

四四二二 我が背なを筑紫へ遣りて愛しみ帯は解かなあやにかも寝む  
とよむ。「帯は解かな」は愛情、貞節のような思想を形成しよう。

「大君の命畏み」(我が大君に召されたる)防人と家族は右様な思想を生活に行つたろう。

四四一六 草枕旅行く背なが丸寝せば家なる我は紐解かず寝む

と〈紐解かず寝む〉という誓いは、送別儀礼という国家的規模に支えられて村落生活の倫理と充実となった。

何時でも戦事的心情に対して村落共同体の心情は矛盾のよう存在する。東歌の〈草と共寝〉の世界はどんな風にして生き残るのか。

草が共寝む 妹なしにして

←

初萩の花妻問ひに

秋萩の妻をまかむと

紫草を草と別く別く伏す鹿の

←

草（和草）の上に紐解かず寝るのは、鹿の花妻のようだ。

花妻なれや紐解かず寝む

防人歌 草枕旅行く背なが丸寝せば家なる我は紐解かず寝む

↔

東歌 足柄の箱根の嶺ろ（寝ろ）の和草の花つ妻なれや紐解かず寝む

（和草は花妻であるからか紐解かず寝る）

紐解かず寝るのは、花妻であるからか。

右の防人歌と東歌を送別儀礼の場に並べてみると「紐解かず寝む」の中味が違っている。〈旅の丸寝〉という現実

は防人歌でも東歌でも同じであるが、防人歌ではまさに防人歌であることによって、そのことの筋をよむが、東歌ではその丸寝を、「箱根の嶺ろの和草」という伝承風の序を持ってきて、というのは万葉集の他の巻の数々の歌との関連によって、含みのある歌にしている。

「紐解かず寝む」は倫理でも充実でもなく、相聞歌の一風情を構成している。

箱根の寝ろの柔草は〈花妻〉であるからか、紐解かず丸寝をすることだ、という心の面白さ。

そしてもう二つは、〈相聞〉を「君」と「妹」との関係を典型とするなら、足柄の名を持った歌にはその例はなく、「背」「児ろ」の形の歌である。足柄山の歌は東国歌の吹きだまりであった。

東歌を他の巻の歌を含んだ発想とみると、

五五〇 大船の念ひたのみし君が去なば吾は恋ひむなただに会ふまでには旅立つ君に対する送別歌である。

三四七七 東路の手児の呼坂越えて去なば吾は恋ひむな後は会ひぬとも

は同様に〈君〉を含んだ東国の送別歌であろう。

三四四二 東路の手児の呼坂越えがねて山にか寝むも宿りはなしに

はその答歌のように存在している。

東国の送別儀礼に含まれる「手児の呼坂」は足柄峠を含んでいるのではないか。

防人歌に、

四三七二 足柄のみ坂たまはり顧みず吾は越え行く……とある。

三一八八 朝霞たなびく山を越えて去なばわれは恋ひむな逢はむ日までに  
三一九〇 雲居なる海山越えてい行きなばわれは恋ひむな後は逢ひぬとも  
は、五五〇、三四七七に似た表現を持ち、

三一九一 よしゑやし恋ひじとすれど木綿間山越えにし君が思ほゆらくに  
は、

三四七五 恋ひつつも居らむとすれど木綿間山隠れし君を思ひかねつも  
に似ている。

三一九四 息の緒にわが思ふ君は鶏が鳴く東方の坂を今日か越ゆらむ  
は、

三四七七 東路の手児の呼坂  
に逆方向から詠んでいるのかも知れない。「トリガナク」というのは都側の発想だからである。「東方坂」という表現も西側からであろう。

足柄峠が東国からの送別儀礼の限界意識だとすれば、西側からも同様に考えられる。  
「東路の手児の呼坂」というのは足柄峠の別名だったのかも知れない。

## 七

三三七一 安思我良乃美佐可加思古美久毛利欲能阿我志多婆倍乎許知豆都流可母

の第三句を、大体は、

『全注』曇り夜の

『講談社文庫』曇夜の

『角川文庫』曇り夜の

という風によんでいる。

「クモリヨノ」は、

三一八六 陰夜之田時毛不知山越えて往ます君をば何時とか待たむ

三三二四 雲入夜之迷間……

とあって、それぞれ「たどきも知らぬ」「迷へる間に」を導いている。

この〈曇り夜の―たどきも知らぬ〉、〈夢かも現かもと、曇り夜の―迷へるほとに〉はそれなりの文脈を辿れようが、  
とすると「クモリヨノアガシタバヘ」(下延へ) はやはり文脈を外れているようである。

そこで『略解』に「按にこもりぬのと有しを訛伝たるか、久は己、欲は奴の誤字なるべし、卷九隱沼乃下延置而とあり」という。

「コモリヌノ」は、

二〇一 隱沼乃 ゆくへも知らに

一八〇九 隱沼乃 下延へ置きて

二四四一 隱沼 下ゆ恋ふれば

二七一九 隱沼乃 下に恋ふれば

三〇二一 絶沼之 下ゆは恋ひむ

三〇二三 隠沼乃 下ゆ恋ひあまり

三五四七 許母理沼乃 あな息づかし

三九三五 許母利奴能 下ゆ恋ひあまり

(三〇二二 隠有小沼乃 下思ひに)

とあつて、こう並べてみれば筋ができてゐる。「隠沼」という表現は「ゆくへを知らぬ」によつてゐる。だから「下ゆ」「下に」「下延へ」なのである。

三五四七の例は東歌である。

あぢの住む須沙の入江の隠沼（隠江とも）のあな息づかし見ず久にして  
は鮮かな飛躍である。

「ゆくへを知らに」「下ゆ恋ふれば」から「あな息づかし」は躍動的な前進である。「隠れる小沼の下思ひ」が「あな息づかし」にふき出したものであろう。一方、

曇り夜のたときも知らぬ山越えて往ます君をば何時とか待たむ

は卷十二の「悲別歌」である。「何時将待」は送別の常用語である。

三七七〇 伊都等可麻多武

三七〇五 伊都等可麻多牟

一八七六 伊時可将待

三二五二 伊時可将待



三三二一 伊時可將待

三九四六 何時鹿將待

二六一三 何時將待

これらは一般的には、「往ます君」、男を送る女側の用語、送別儀礼表現であった。東国の女も、多分この、卷十二の歌も知っていたであろう。

三一九〇 雲居なる海山越えてい行きなばわれは恋ひむな後者相宿友

三四七七 東路の手児の呼坂越えて去なば吾は恋ひむな能知波安比奴登母

そして卷十一では、

二五三九 相見ては千年や去ぬる否をかもわれや然思ふ君待ちかてに

三四七〇 相見ては千年や往ぬる否をかも吾や然思ふ君待ちがてに  
という関係がみられる。

東国に關係するものに、

三一九四 息の緒にわが思ふ君は鶏が鳴く東方の坂を今日か越ゆらむ

三一九五 磐城山直越え来ませ碓崎の許奴美の浜にわれ立ち待たむ

などが考えられ、『講談社文庫』に「都の悲別歌ではない。東国宿駅の女の歌か」という。

「ワレタチマタム」は右のと、

三四五五 (東歌) 和礼多知麻多牟

八九五 (憶良) 和礼立待

の三例がある。

卷十一に、

二七五一 あぢの住む渚沙の入江の荒磯松我が待つ児らはただひとりのみ

卷十四に、

三五四七 あぢの住む渚沙の入江の隠り沼のあな息づかし見ず久にして

を松田好夫氏は「潜在問答歌」という風に把握される。

上二句を同じくして、三句までは序である。二首で何らかの關係を持つらしいのは推測される。ただ「荒磯松」と「隠り沼の」は視覚が非常に違う。いわば〈隠り沼〉は〈荒磯〉ではない。下二句に問答の気配は稀薄である。どちらとも〈待ち〉の姿勢で往来性がない。

ただ「隠り沼の」「あな息づかし」の關係は前掲のようにここ一例で、これは鮮かな活気である。「隠り沼の」「下ゆ、に」は流出口のない隠り沼だから、地下を通じて水が流れているだろうという、客観性に対してここは「隠り沼」が（主語）「息づかし」（述語）なのである。この東歌における「隠り沼」の意想外な發展と、

「クモリヨノ下延へ」

は東国的な双対をなすものだろう。また、

卷十二の、先掲、

曇り夜のだときも知らぬ山越えて往ます君をば何時とか待たむ

は男を送る女側の歌。（これを送別儀礼として、その送別儀礼が足柄山を含むような場合）足柄の御坂畏み久毛利欲能 阿我志多婆倍乎言出つるかも

という関係図も想定されうるのではないか。

卷十二 三一九一

よしゑやし恋ひじとすれど木綿間山越えにし君が思ほゆらくに

卷十四 三四七五

恋ひつつも居らむとすれど木綿間山隠れし君を思ひかねつも

というのは、どちらも残される女側の歌であるが、〈木綿間山〉の帰属、伝承が分らない。

卷七 一四一二 挽歌

吾が背子を何処行かめとさき竹の背向に寝しく今し悔しも

卷十四 三五七七

愛し妹を何処行かめと山菅の背向に寝しく今し悔しも

は東歌でも「挽歌」に分類されているが、東国で、他の万葉巻の作者未詳の歌を取り入れることが推測される。  
卷七、十、十一、十二などの世界と関連している。